

FIG2023 年度第 7 部会第 2 部会合同大会出席報告

日本測量者連盟幹事（第 7 部会担当） 海津優

2023 年 10 月 2 日から 10 月 4 日までオランダ、ディーフェンタール市において開催された標記会議に出席したので概要を報告する。

1. 会議の概要

本会議は FIG（国際測量者連盟）の第 7 部会（地籍、土地管理担当部会）と第 2 部会（測量教育担当部会）の合同会である。会場はオランダ、ディーフェンタール市で会期は 2023 年 10 月 2 日より 10 月 4 日の 3 日間であった。

合同会で発表数が多かったのが 2 室に分かれての発表であったが、従前 1 室であったので、すべての講演を聴くことができるのが部会総会の魅力の一つであったので、若干残念なことであった。

会議の主たるテーマは測量の DX であったが、3D 測量およびデータの管理流通の話が多くあった。

海津はフライトの関係で 1 日目午後からの出席であったが、主として LADM および土地管理の議論を中心に聴講し、1 日目午後 4 時からのカントリーレポート他のセッションで我が国地籍再測量の進捗と人材供給について発表した。オンサイトでは韓国代表から都市部に入ると速度が落ちるのは同じ悩みを共有しているとのコメントがあり、筆が狭小になりがちであることと地価の高さが進捗を妨げていることを説明した。また、発表後は多くの出席者から新人のリクルートの難しさ生涯教育などにつき、議論を求められた。

2. LADM 関連の発表

まず英国のアンソニーベック、シュー・ルーは LADM が土地管理におけるデジタル環境としてマシンリーダブルで透明性の高い数値的かつ自動化されたリアルタイム登記を通じて地籍の DX を進める手段となると主張していたが、地方自治体における土地行政の統合とセミリアルタイム化は GIS 導入における目標の一つであってみれば誠にその通りというべき内容であった。

次にこれまで LADM を中心となって指導してきたトゥエンテ大（オランダ）のランミン教授が退官し、名誉教授となられ、今後 LADM は同大のオストロム教授が引き継いで進めてゆくことが報告された。また、これに伴い、ランミン教授の特別講演があり、この標準が発案された背景、地域の差を言い立てての消極的意見などの厳しかった思い出などが語られた。基本的には既知のことではあるが、当事者の言葉として、「思い」

がよく伝わり、関係者にさらなる努力を促す内容であった。

一言でいえば、土地所有や占有、利用権については形態や歴史、地域ごとの事情などにより様々な違いがあるものの現実の取り扱いを虚心坦懐に見れば極めてよく似た手続きが行われており、そこを標準化するだけで、互いに行われていることの理解が進む。というものである。

さらにランミン、オストロム、カーラ、カロジアンニの連名で発表された LADM 第 2 版の進捗状況では第 1 編がほぼ終了し、それ以外も順次編集が進んでいること、6 編に分けて分野別に取りまとめていることなどが報告されたが、その概要に第 6 編実装の中にはプロパティの測り方のガイドラインが含まれるとの記述がある。ことが GIS の記述標準を少し超えてくる可能性があるので注意しておく必要を感じた。

3. 第 7 部会と第 2 部会のカントリーレポート

各国から地籍の進捗並びに技術者教育について発表があった。海津もこのセッションにおいて発表した。

コロンビアからの発表はスペイン語であったためよくわからなかったが、多目的地籍と行政の変革及びその人材の確保という趣の発表であった。

オランダからは、地籍図上と行政地図上の面積の不整合を調査した結果の発表があった。一筆地ごと、行政区画ごとの差を可視化したものである。都市部と田舎での差や特定の場所で差の大きいクラスタがあるなどの初期的な結果が出ているとのことである。スペインでは日本同様地籍と登記が別の省庁所管であるが、国家座標で座標付けされた地図を用いることを法令で定めたとのことで、ゆっくりであるが前進しているとの報告があった。

ノルウェイからは大学と協力して調査と測量を行ったケースが報告された。学生実習を地籍調査結果とするという思い切ったことであるが、人手の課題をある程度解決できるところが味噌なのだと思う。

4. オランダ地籍公社訪問

オランダ地籍公社は陸地測量部を母体とし、測地測量、基本地図作成から地籍までをスコープに入れている組織である。人的にはトゥエンテ大学と強い結びつきがある。見学では、前半は当該公社の事業紹介があり、その後付置されている地籍博物館の見学があった。

初期の地籍図、地籍簿、平板測量関連の道具、三角測量の説明、各種機材、基線測量の道具、少しだけ使われたタキオメーター、各種測距儀、最近の GNSS およびトータルステーションに加えて、写真測量関連機器および計算機類が展示されている点、我が国の地図と測量の科学館に似たコンセプトでありながら、より現場志向であること、その

ためか、お年寄り（1960年代から現場をやってきたと言っていた）が古い技術の説明役として頑張っていることが興味深かった。

5. ウクライナ戦争の影響

昨年からはまったウクライナの戦争は直接会議に影響するものではないとはいえ、移動には大きな影響があり、例えば日本からは、往路はアラスカ、カナダ、グリーンランド上空を経てフランクフルトという航路であり、帰路はアルメニアから黒海のトルコ沿岸を通り、カザフスタン、中国、韓国の上空を経て羽田へという航路であった。シベリア上空が通れないので、偏西風を上手に利用してはいるものの極めて効率の悪いことであった。